

# 「顔の見えるサポート体制」を構築

## 校内で孤立しない、教頭の理解が重要

柏市立土南部小学校 西田光昭教諭（前・柏市教育委員会指導主事）

### <プロジェクト以前>

私自身は、100校・新100校プロジェクトに参加していませんでした。ICTを最初に活用したのは、天体観測の授業です。コンピュータシミュレーションを使うと、星座早見版では不可能な、「今夜はこんな月が出ているはず」と予測した上で実際の月と見比べ確認することができました。その効果は絶大で、この時コンピュータの活用は、教育に有効であると、確信しました。

### 実践の経過、教訓

#### KIUの一員として

私がネットワーク活用の有効性に着目するようになったのは、平成9年度から実施された赤堀侃司・東京工業大学教授が中心になって進められた柏市立柏第六小学校での海外日本人学校との交流プロジェクトです。CU-SeeMeを使いましたが、テレビ会議用のコンピュータは2台しかない、マシン・ネットワークの負荷は大きい、など今の時代から見ると技術面・設備面で問題山積みのプロジェクトでした。しかし、教育効果は抜群で、例えば子どもたちは外国の学校には「上履き」がないといったことに驚き、文化の違いを感じていました。



翌年、柏市立教育研究所に移り、市の情報教育の事務局を担当しました。そこでは機器導入や設計を行うとともに、教育研究所と共同で柏市の情報教育を支援していた柏インターネットユニオン（KIU）のメンバーとして、相談のあった学校に技術的な解決策を示す、といった活動をしていました。

13年度からは柏市立土南部小学校に転任しましたが、現在もKIUの一員として、その活動を継続しています。

例えば、中原小学校ではネットデイにより、コンピュータ室と教室をつなぎ、教室からでもコンピュータ教室と同じ作業ができるようにしました。市の予算だけでは十分にできなかったところは、ネットデイでカバーしたわけです。

#### 情報モラル教材を継続作成

また、インターネットの影の部分への対応が難しかったため、Eスクエア・プロジェクトで開発された学習・指導教材「ネット社会の歩き方」と整合性をとりながら、独立行政法人教員研修センターの「情報モラル研修教材2003」の開発に関わりました（囲み欄参照）。

初心者の方にも分かりやすいように工夫し、指導の方法や情報モラルの「失敗経験をシミュレーションできる」教材を作りました。

ICT活用場面における良い・悪いの判断基準は、日常生活のマナー指導と同じで、周りの状況を捉えながら常に指導していかなければならない性格のものだと思います。例えば、著作権の概念なども、子どもにとっては難しいようですが、最初は何が問題なのか分からなくても、子どもたちに繰り返し指導していくことで分かるようになるものです。

#### 情報モラル研修教材2003

独立行政法人教員研修センターが、越智貢・広島大学教授を委員長に開発したものです。ネット体験のシミュレーションやアニメーションを利用し、子どもたちの周辺に起こりやすい事件・事例を、初心者の方にも指導しやすい教材の形で提供している。Webや掲示板、メール、携帯電話を利用する際に起こりやすい事件をアニメーションで体験できる「体験から学ぶ」、スパムメールの受信や有害サイトへの遭遇といった各種事例とそうした事柄についての指導案を添付した「授業素材」、掲示板やチャットをシミュレーションできる「シミュレーション」で構成されている。[http://sweb.nctd.go.jp/kyouzai\\_new/index.htm](http://sweb.nctd.go.jp/kyouzai_new/index.htm)

## 10年間を振り返って

**「人の役に立つ」がICT活用の原動力**

私がICTを活用した教育を続けているのは、「自分にできることが人の役にたっている」ことがうれしいからです。自分が必要とされている、という感覚を持ると、多少無理をしても苦になりません。

第2に、大学・企業・教員・遠く離れた人々とのつながりができることです。ICTを活用した授業を手がけた頃は孤立しがちでしたが、ネットワークを通じて多くの知り合いができました。第3は、インターネット活用の準備段階や活用の結果、子どもたちの「生の声」を聞くことがとてもよい刺激になります。



コンピュータ室で教材を提示して

**<成功の秘訣>**

ICTを活用した授業を成功させる要因としては、次のようなことが重要ではないでしょうか。

**サポート体制**

身近なところでのサポート体制が重要だと思います。KIUではサポート者と受ける人との「顔の見える関係」を作るようにしています。例えば、CECにもヘルプデスクがありましたが、利用者数が伸びなかったと聞いています。これは「顔の见えない人には相談しづらい」ことの現われではないでしょうか。

**無理をしない**

KIUのメンバーは、自分のできることを行い、無理はしません。自分でできない場合は、他に頼むなど、相互に助け合うことにしています。

**孤立しない**

学校間のプロジェクトを実施するには、最終的には学校のバックアップが必要であり、その体制を組めるところでしかプロジェクトは実施できないという事実をはっきりと認識することが重要です。

**人材の育成**

アイデアを持って実践に取り組む人と、それをサポートする人のコミュニケーションをとり、一人が抜けても活動が停滞しないように、リーダー的な人を育てる必要があります。

**対面機会**

実際に人と会って話をする場をできる限り多く持ち、コミュニケーションをとることも重要です。

**教頭先生の理解**

校長先生の理解を得ることが最も大切ですが、そのためにはむしろ、教頭先生の理解を得ることが重要であると私は考えます。一般論ですが、教頭先生が理解し、教頭先生を通して校長先生にも働きかけていただいた方が、校長先生の理解は得やすくなります。

**校長先生を対象にした研修会**

実際に校長先生をプロジェクトに巻き込むことは理想ではあっても難しいようですので、校長先生を対象にした研修会を実施してもらい、「今の学校に何が必要か」を知ってもらうことは重要です。

**研修会・ワークショップでの留意事項**

先生のニーズを事前把握しておくことは難しいので、一人一人の先生が自らの課題に取り組めるように、なるべくオーダーメイドの研修会になるよう工夫をしました。研修会はあくまで入り口に過ぎず、学校に戻ってからいかに使うかに役立つようにし、そのサポート体制をオンラインで作りました。

**レポート**

学校の先生は日常の指導だけでも時間が足りないのに、先生に提出を求める報告書はできるだけ簡単にしてあげるとよいと思います。

**指導しやすい環境の提供**

先生には、安いソフト・ハード・データ、使いやすいシステムを提供してあげることが大切です。学校は裕福ではありませんし、複雑で高度な環境よりも、ちょっとした工夫で使いやすい環境を作る工夫をしました。